

大学生の食生活実態の一考察

——都会型学舎の場合——

横 山 勝 英

キーワード

「朝食」行動と意識
「昼食」行動と意識
健康食への配慮
味の満足度
食堂の満足度

目 次

はじめに

1. 「朝食」行動の実態
2. 「昼食」行動の実態
3. 食事をする際の健康への配慮に関する意識
4. 学生の「食」と「学生食堂」に関する意識

おわりに

はじめに

最近の学生の意識と行動は多様化、複雑化しており、深夜アルバイトなどで朝早く起きることができない学生も少なからずおり、学生の健康を考えると好ましいとはいえない現状がある。大学における教育においても、消費者教育、生活科学あるいは人権教育として「食育」に関する知識や技術を伝えていくことが必要な状況にある。また、大学及び大学生協などでも、食堂経営には、構成員、組合員のニーズにあった食事を提供するだけでなく、教職員や学生の食習慣の改善や健康に配慮した運営を行うことが社会的に要請されている。

大学のサークル活動において、最近頭角を現してきた立命館大学アメリカンフットボール部

では、立命館大学生協と契約して、夕食で4000キロカロリーをとることができ、昼食についても1000円以上を生協で食べるように指導しているという¹⁾。

本来、「食」行動は、個々人の自由な選択に任されるべきで、一方では、スローフード運動やトレーサビリティ、地産地消運動などの「食」に対する高まりがある反面、利便性や経済的に満たされているためか「食」への関心が薄くなり、摂食障害、肥満や生活習慣病が増加するなど、「食」をめぐるさまざまな問題が全国的に生じ、2005年6月には「食育基本法」が第62回国会で成立し、同年7月15日に施行されるに至っている。

本稿では、大学生の食生活の実態を調査、分析し、大学の周辺に多くのレストランや食堂、コンビニなどのある大学の学生の場合の、「食」と「学生食堂」に関しての課題を明らかにしたい²⁾。

1. 「朝食」行動の実態

本稿では、2005年7月に龍谷大学深草学舎で

- 1) 龍谷大学生協「第6回理事会議案書」9ページより。立命館大学ホームページより、2005年1月「立命館ニュース」参照。
- 2) 食生活に関しては、常識的なことではあるが、概して、都市部か否かの違いが認められているので、本稿でも調査地である龍谷大学深草学舎を一般化して、都市型学舎とした。厚生労働省研究班による多目的コホート研究、JPHC Studyのホームページ <http://epi.ncc.go.jp/jphc/survey/dietary.html> 参照。

パン、牛肉、コーヒーなどの、いわゆる西洋食品は、都市部で多く摂取されているという。

筆者の授業時間の火、水、金の2講時、3講時の授業に参加している経営学部、法学部を中心とする学生（359人）を対象に実施した調査をもとにしているの、大学生の意識と行動の一部を代表しているに過ぎないかもしれないが、それも若者の意識と行動の現実の一部であるといえる³⁾。

今回分析する2005年7月に行った「食生活に関する調査」の回答者の基本的属性は、性別では男性59.9%（215人）、女性40.1%（144人）となっており、年齢構成では、18～19歳52.0%（187人）、20～21歳39.6%（142人）、22歳以上8.4%（30人）となっており、通学形態別では、自宅通学者58.0%（208人）、自宅外通学者42%（150人）となっている⁴⁾。

学生の就寝時刻に関して、『龍谷大学学生生活実態調査報告書—2003年度版—』によると、日本私立大学連盟の実施する私立大学全体と龍谷大学全体を比較すると、「午前1時頃」が私立大学全体では31.2%、龍谷大学全体では31.5%、「午前0時頃」が私立大学全体では27.9%、龍谷大学では29.6%、「午前2時頃」が私立大学全体で21.6%、龍谷大学では20.1%、「午前3時以降」が私立大学全体では8.5%、龍谷大学全体では7.5%で両者に殆ど有意な差があるとはいえない結果となっている⁵⁾。いずれの場合も、平均して午前1時以降に寝る学生が6割前後を占めている。これでは朝が早く起きることができず、朝食を抜く学生が多くいても納得できることである。ある意味では、龍谷大学は全国の平均的な大学であるともいえる。

今回実施した調査で、性別に「朝食」を食べ

るか否かを聞くと、「毎日食べる」のは、51.4%（男子48.1%、女子56.3%）に過ぎない。『2004年度 早稲田大学学生生活調査』によれば、「毎日きちんと食べる」とする割合が50.2%であることから、質問の形式は少し違うが、龍谷大学生も平均的な結果であることがわかる⁶⁾。今回の調査では、男性では、「食べない」とする割合が18.2%で、女性（9.0%）より9.2ポイント高くなっている。

聖心ウルスラ学園短期大学による自宅通学生が9割のN短大生112人を対象にした2002年2月の「食生活」調査によれば、朝食を毎日とっている短期女子学生は66%あり、ときどき欠食するは26%、欠食するは8%であったそうであるが、今回調査の女子だけを比較すると、欠食するのは1ポイントしか変わらないので、これも全国の平均であるといえる。ただし、毎日朝食をとっている学生の割合が10ポイント違っているのは、単に調査回答者の属性が短期大学生の場合、自宅通学者が多いという違いだけなのか、あるいは、調査時期が2年違うことにより、ますます朝食を毎日とる学生が減ってくる予兆であるのかは、他の調査結果も比較、分析する必要がある⁷⁾。

第1表は、性別に「朝食」を食べるか否かを更に通学形態である住まい別にみたものであるが、予想された通り、自宅通学者では63.0%が毎日朝食を食べているのに、自宅外通学者では35.3%しか毎日食べていないことがわかった。自宅外通学者の場合には、男女ともそれぞれ「食べない」の割合（男子28.9%、女子18.9%）が高くなり、統計的には男女間には分布の一樣性検定で有意差があるとはいえない。自宅外通学者では「食べない」の割合が25.3%で、自宅

3) 今回は、調査対象の学部により偏りがあり、学部別項目を入れても意味がないので、学部別にデータをとっていない

4) データの統計処理の都合で、項目によっては無回答を除いたので、全ての項目において総数が359人とはなっていない。

5) 『龍谷大学学生生活実態調査報告書—2003年度版—』の概略は、龍谷大学ホームページから見ることができるが、本稿では龍谷大学学生部所蔵のものを参照した。

6) 『2004年度 早稲田大学学生生活調査』に関しては、早稲田大学のホームページに紹介されているものを参照した。

7) 女子短期大学生の食生活調査に関しては、独立行政法人農畜産業振興機構 alic 砂糖類ホームページ http://sugar.lin.go.jp/japan/view/jv_0306a.htm 参照。

第1表 通学形態(住まい)別性別朝食をとるか

住まい		朝食をとるか			合 計		
		毎日食べる	時々食べない ことがある	食べない			
自 宅	性別	男性	度数 性別の%	72 61.5%	34 29.1%	11 9.4%	117 100.0%
		女性	度数 性別の%	59 64.8%	29 31.9%	3 3.3%	91 100.0%
	合計	度数 性別の%	131 63.0%	63 30.3%	14 6.7%	208 100.0%	
自宅外	性別	男性	度数 性別の%	31 32.0%	38 39.2%	28 28.9%	97 100.0%
		女性	度数 性別の%	22 41.5%	21 39.6%	10 18.9%	53 100.0%
	合計	度数 性別の%	53 35.3%	59 39.3%	38 25.3%	150 100.0%	

通学者の6.7%より18.6ポイント高い。「食」行動に関して男女差別の役割分業意識が未だ残っていて、大学入学前に自分で料理する機会が少なかったことが予想される男性だけでなく、女性も朝食を食べない学生が多いといえる⁸⁾。

朝食を「毎日食べる」あるいは「食べない」ことに関して、男女間に統計的な有意差がないということは、朝食を作るのが面倒くさいと感じることに男女差がなく、男女の家事に関する役割分業意識も薄れてきているからかもしれない。

8) 今回は、夕食に関しての調査をしていないが、味の素調査によると、一人暮らしの若者を対象にした調査で、「自分で料理したものと市販のもの(おにぎり、コロッケなど)を組み合わせる」との回答が男性48%、女性58%で最も高かった(複数回答)が、また、1999年に行った調査と比べて大きく比率が上がったのが、「冷凍食品やレトルト食品、カップ麺などを作る」(男性41%、女性36%)ということであったという。料理が簡単に作れることは歓迎されることではあるが、朝食を食べない自宅外通学の学生達は1日の栄養摂取量を考えた食事をしているかが問題である。味の素調査に関しては、日経レストランホームページ <http://nikkeibp.jp/wcs/leaf/CID/onair/jp/biz/378673> 参照。

朝食で何を食べているのかをみると、朝食を食べていても、「パン」を食べているものが45.6% (156人) で最も多く、次いで「ご飯」を食べているものが32.5% (111人) であるが、ご飯あるいはパンで炭水化物を摂取している学生の割合は、78%強に過ぎないし、「牛乳」を飲んでいるのは22%弱、「コーヒー」が17.5%、「卵」を食べているのは16.7%、「味噌汁」は14.3%、「肉」は12.6%、「野菜」と「果物」はそれぞれ10.2%にすぎない。

朝食に食べているものを6種類あげてもらい、そのうち「ご飯」に関して、第1位にあげたものは108人、第2位にあげたものは2人、第3位にあげたものは0人、第4位にあげたものは1人、第5位、第6位とも0人となっているが、「パン」に関しては、第1位にあげたものは51人、第2位にあげたものは62人、第3位にあげたものは32人、第4位にあげたものは7人、第5位にあげたものは4人であった。パンを食べているものが一番多かったが、パンを主食と考えていないことがわかる。

朝食で食べているもののうち、「ご飯」、「みそ汁」、「卵」をあげたものは84人 (23.4%) で、比較的きちっとした朝食を食べているように考

第2表 通学形態別朝食をとるか別何時から朝食とらないか

住まい			何時から朝食とらないか					合 計
			小学校頃 から	中学校頃 から	高校頃 から	大学に入っ てから	その他	
自 宅	朝食を とるか	毎日食べる				1 100.0%		1 100.0%
		時々食べないことが ある	2 22.2%	3 33.3%	3 33.3%	1 11.1%		9 100.0%
		食べない	2 15.4%	4 30.8%	4 30.8%	3 23.1%		13 100.0%
	合 計		4 17.4%	7 30.4%	7 30.4%	5 21.7%		23 100.0%
自宅外	朝食を とるか	毎日食べる	1 50.0%		1 50.0%			2 100.0%
		時々食べないことが ある	1 6.7%		1 6.7%	9 60.0%	4 26.7%	15 100.0%
		食べない	1 2.9%	3 8.8%	6 17.6%	21 61.8%	3 8.8%	34 100.0%
	合 計		3 5.9%	3 5.9%	8 15.7%	30 58.8%	7 13.7%	51 100.0%

えられるが、多いとはいえないことがわかった。

朝食を毎日食べているのは全体では半数にすぎないが、朝食をとらない学生に、朝食をとらなくなった時期を聞くと、朝食を時々食べない場合とほとんど食べない場合では、統計的に有意差があるとはいえず、小、中、高、大になるにつれて朝食をとらないことが多くなっている。

しかしながら、第2表は、通学形態を表す住まい別朝食をとるか否か別に朝食を食べなくなった時期をみたものであるが、自宅通学者の場合は、大学に入る前に既に食べないことがあり、大学に入ってから朝食を食べなくなるものは少ないといえる。したがって、大学に入ってから朝食を食べないことが統計的に多くなるのは、自宅外通学生がその割合を押し上げているといえる。

通学形態である住まい別に、性別に朝食をとらない理由をみると、総数が少ないので、5%の有意水準では、通学形態別でも、性別でも回答の分布の一様性の検定では有意な差があると

はいえなかった。しかしながら、通学形態別性別にみると、自宅通学者の場合には、女性の場合は「食べたくない」の比率が部分的に、5%の有意水準で高くなっているといえる。日本に限らないが、女性は太っているよりは痩せている方が異性に持てる傾向が未だ残っているためか、健康より美容の視点から、女性の方がダイエットをしすぎて摂食障害になる確率が高い⁹⁾。

2. 「昼食」行動の実態

昼食で食べた種類をきくと、「ご飯」が圧倒的に多く65.5%を占めており、次いで「肉類」39.6%、「野菜」32.4%、卵20.2%、「麺類」

9) アメリカでは思春期や青年期の女子の約4%にみられ、年々増加し、若年化する傾向にあるという。最も発症しやすいのは10代半ば頃で、思春期の女性の0.5～1%は発症するといわれているという。http://www.cure-all.org/seshoku.html 参照。患者の95%が女性で、思春期に多くみられるともいわれている。http://www.osaka.med.or.jp/health/family/96/96.html 参照。

19.9%、「パン」18.2%などの順となっている。昼食では、朝食よりは栄養のバランス感覚が食物の摂取行動に働いていると解釈できる。

学生達は昼食に関して何処でどんな種類のものを食べているのかをみると、「ご飯」を食べている比率に関しては、校内食堂で食べている場合は66.3%、教室・研究室の場合は64.3%、自宅の場合は48%であった。

学生食堂で昼食を食べている場合は、「野菜・豆類加工食品」46.1%、「肉類」43.5%と同じ程度に食べている。学生食堂で食べれば、野菜もある程度入っているが、学生食堂以外で食べる場合には、肉類よりは有意な差で野菜の摂取量が少ないことが分かる¹⁰⁾。健康のためには、野菜、魚や豆類加工食品ももっと摂取されることが望ましいが、食事の欧米化で、肉類に偏重した食事になっていることがわかる¹¹⁾。

性別に昼食で食べた種類を聞くと、男性の方が「肉」を食べる比率がやや高いが、「ご飯」や「野菜」を食べる比率は男女間に有意差があるとはいえなかった。

通学形態を表す住まい別に昼食で食べた種類を聞くと、昼食に関して、「ご飯」を食べるの

は、自宅通学者が70.1%に対して、自宅外通学者では58.7%、「肉」を食べるのは自宅通学者が46.7%に対して、自宅外通学者では29.7%となっており有意差があるといえる。龍谷大学生の場合、経済的な理由からか、自宅外通学者は肉を食べる機会が少ないといえる。「野菜」についても、自宅外通学者の方が自宅通学者より食べている学生がやや少ないようにもみえるが、自宅外通学者は外食をする機会が多いなど日常の食生活習慣が影響しているといえる。

昼食を摂る場所を聞くと、学生食堂が54.8% (193人)、教室・研究室が19.9% (70人)、校庭が8.0% (28人)、自宅・アパート16.4% (58人) などであるが、過半数が利用する学生食堂では、現在以上に1日の学生達の「食」行動を把握し、栄養のバランスを考えたメニューを提供する必要がある。

以上のように、朝食、昼食ともに栄養のバランスに問題があるという学生が多いといえるが、学生たちの健康に関する配慮はどのくらいあるかなどについて次に考察してみることにしよう。

3. 食事をする際の健康への配慮に関する意識

性別に健康配慮の食生活をしているかをみると、分布の一樣性の検定では男女間に統計的な有意差があるとはいえないが、残差分析でみると、女性の方が「全く配慮していない」と回答する比率がやや低いといえる。日本の社会では、女性は美容の視点から食事制限というダイエットを意識させられる場合が多く、健康保持のダイエットにも男性よりは普通以上に意識せざるを得ないと考えられる。なお、健康に配慮する食事のとり方の意識には、大学生だけを調査対象としているので、年齢別、住まい別には分布の一樣性の検定では統計的に有意差があるとはいえない。実際の食生活では必ずしも栄養のバランスが保たれているとはいえないが、68.2%の学生が、普通程度以上に健康な食事に配慮をしていると主観的に思っている。

健康に非常に配慮している場合と全く配慮し

10) 生協食堂の定食は、ある程度栄養バランスが配慮されているが、学生に好まれるのは定食ではなくてアラカルトで、自分の好きな物を選ぶ方式が増えている。野菜は安くないので自宅でも不足しがちであるが、その生活習慣が好みとして野菜嫌い、野菜不足になるのだろう。野菜（海草、茸を含む）300グラム（緑黄色野菜を100グラム、淡黄色野菜を200グラム）、芋類を100グラム、合わせて400グラムを毎日食べることは容易なことではないのかもしれないが、実行しておれば生活習慣病なども増えることはないだろう。アラカルト・メニューが好まれるといっても、時間的余裕がなく、かなりの学生は定食を食べているものと思われるので、料理の総カロリーや栄養表示は現在以上に配慮すべきであろう。

11) エネルギー消費の激しいスポーツなどでは、大豆などに含まれるイソフラボンやペプチドなどのプロテイン類などを多くとることが好ましい結果を生じると言われているが、スポーツ系サークルの強化のためには、今回の調査からもっと食事に関して留意すべき事がわかる。

第3.1表 第3表を散布図に表したもの

	第1軸	第2軸
全く配慮していない	0.800727	0.023273
あまり配慮していない	-0.02699	0.141208
普通程度配慮	-0.03166	0.106231
配慮している	-0.35725	-0.10287
非常に配慮している	0.242681	-0.60886
全く関心がない	0.61872	0.008746
あまり関心がない	-0.06211	0.141875
少し関心がある	-0.03047	0.155513
かなり関心がある	-0.4014	0.004018
非常に関心がある	-0.03302	-0.41497

第1軸 × 第2軸

第2軸

第1軸

◆非常に配慮している

非常に関心がある

配慮している

かなり関心がある

普通程度配慮

あまり配慮していない

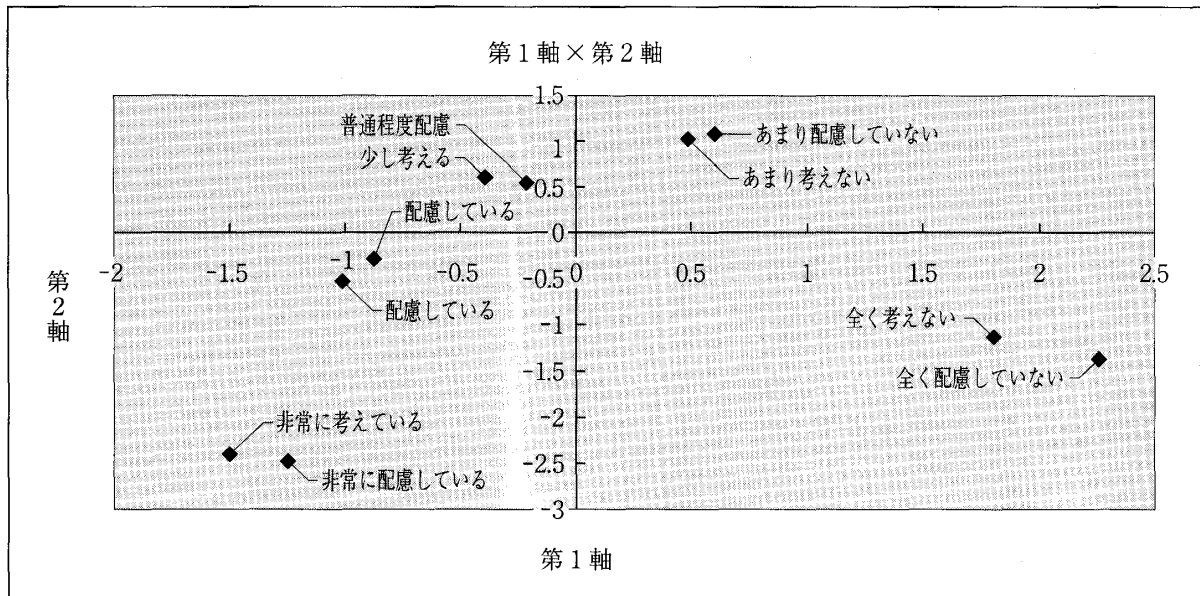
あまり関心がない

少し関心がある

全く配慮していない

全く関心がない

第4.1表 第4表を散布図に表したもの



健康な食事に関して配慮している度合い別に食事の総カロリーへの関心の度合いをクロスしたものに重み付けをした双対尺度法の結果であり、第3.1表はそれを図示したものであるが、健康な食事への配慮別栄養のバランスへの関心の程度をみると、これも当然のことながら、意識的には健康な食事への配慮の度合いが高いほど、栄養のバランスへの関心も高いことがわかる。第4表は、健康な食事への配慮別栄養のバランスへの関心の程度に重み付けをした双対尺度法の結果であり、第4.1表は、それを図示したものである。

健康配慮の食事をしているか否か別に、スローフード運動（健康や情緒へのマイナス影響や食文化の荒廃を危惧する警鐘として提唱され、伝統的な食文化を尊重しようとする運動）の認知度をみると¹²⁾、直線的な相関ではないが、比率をみると健康な食事への配慮が高くなるに従ってスローフード運動の認知度が高くなるという関連がある。第5表は、健康配慮の食事をしているか否か別にスローフード運動の認知度に関して双対尺度法を適用した結果である。第

5.1表は、それを散布図にしたものであるが、健康な食事を「全く配慮していない」場合にはスローフード運動を「全く知らない」とする学生が多く、健康な食事を「非常に配慮している」場合には、スローフード運動を「非常によく知っている」とする学生が多く、統計的にも有意差があるといえる。

健康な食事への配慮別に地産地消 [local production and local consumption system] 運動の認知度をみると、地産地消は、「(1) 輸送コストの低減, (2) 鮮度の保持, (3) 生産者と消費者との信頼関係の構築, (4) 農業担い手の育成, (5) 地域経済への貢献などの効果」などがあり¹³⁾、BSE 問題や遺伝子組み換え作物など食の安全性への信頼が根底から揺らぐ状況のもとで、注目の度合いが高まっている運動とはいえ、今回の調査ではまだ十分認知されておらず、7割以上があまり認知していないといってよいだろう。健康な食事に普通程度以上に配慮していても、地産地消運動についてあまり知らない者が多く、健康な食事への配慮の程度により地産地消の認知の分布は、一様性のカイ自乗分布検定によって、5%の有意水準では有意差がある

12) 『知恵蔵 2004』, 『imidas 2006』 電子 WEB Library 参照。

13) 『imidas 2006』 電子 WEB Library 参照。

第5表 健康配慮の食事をしているか否か別にスローフード運動の認知度に関して双対尺度法を適用して重み付けをした結果

	第1軸	第2軸
少し知っている	-0.00835	-0.01179
かなり知っている	-0.07773	-0.26024
あまり知らない	-0.26183	-0.07349
全く知らない	-0.01543	0.18362
非常によく知っている	0.846906	-0.08521
配慮している	-0.05926	-0.1137
普通程度配慮	-0.09617	-0.09811
あまり配慮していない	-0.15846	0.164195
非常に配慮している	0.949344	-0.08253
全く配慮していない	0.144259	0.31606

とはいえない。

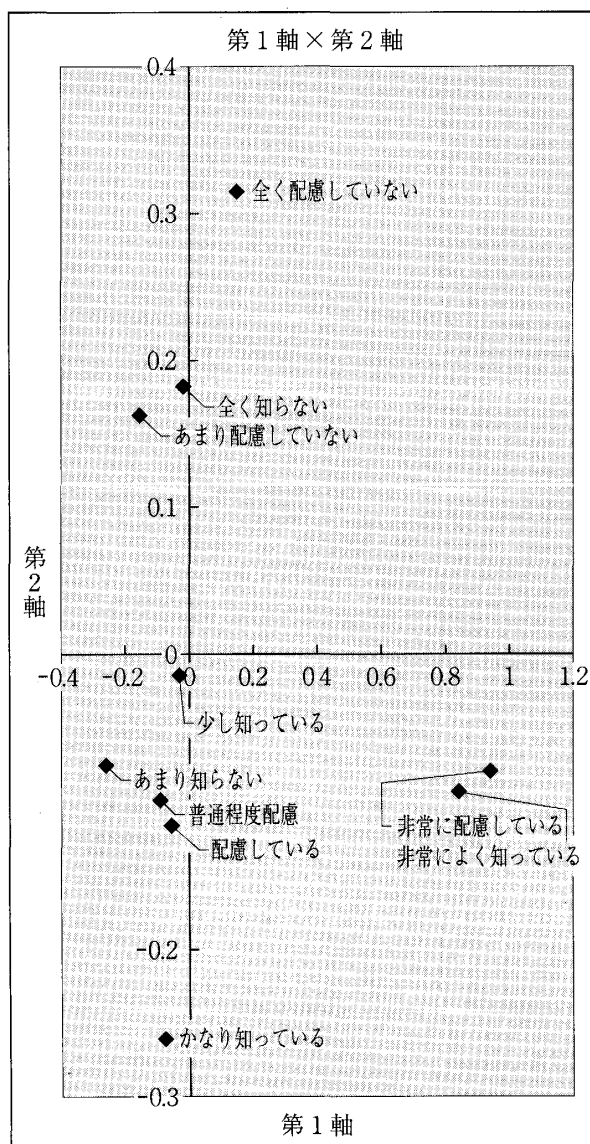
通学形態である住まい別に地産地消の認知度をみると、自宅外通学者の方が地産地消をよく知っているという結果になっている。自宅通学者の場合は、自分の健康や「食」に関しては親任せになりがちで、自宅外通学者の方が、意識としては健康に配慮しなければならないと思い、地産地消などに関しても認知度が高くなっているのかもしれない。

健康な食事への配慮別に、農産物、加工食品などの生産から流通の履歴を追跡できる仕組みであるトレーサビリティ (traceability) の認知度をみると、健康な食事に「非常に配慮している」場合には、トレーサビリティを「全く知らない」という学生は、他の場合に比べるとやや少ないといえるが、ここでも健康配慮の食事をしているか否かによって、トレーサビリティの認知度の分布は、一様性のカイ自乗分布検定により、5%有意水準では有意差があるとはいえない。

以上、健康な食事への配慮と関連の強そうな諸要因をみてきたが、健康な食事への関心が無いとはいえなくとも、必ずしも積極的に健康な食事への配慮が強いとはいえない結果しか得られなかった。

厚生労働省が2005年12月22日に発表した人口

第5.1表 第5表を散布図にしたもの



動態統計 (年間推計) によると、2005年の出生数は過去最低で、死亡者数が増え、差し引きで1万人の自然減になったというが、健康増進法や食育基本法がつくられても、健康に配慮した「食」意識を高める教育システムが構築され、働きながら子育てが安心して行える条件が整備されなければ、伝統的な「食」産業が衰退し、未婚化、晩婚化、少子化などがますます進んでいくだろう。

第6表 通学形態（住まい）別性別友人と一緒に食事をするか否か

住まい			友人と一緒に食事をするか			合 計
			1人で食事をする ことが別い	時 々	毎日一緒に食事 をとる	
自 宅	性別	男性	9 7.7% 1.0	66 56.4% 3.4	42 35.9% -3.8	117 100.0%
		女性	4 4.4% -1.0	30 33.0% -3.4	57 62.6% 3.8	91 100.0%
	合 計		13 6.3%	96 46.2%	99 47.6%	208 100.0%
自宅外	性別	男性	17 17.3% .7	62 63.3% 2.6	19 19.4% -3.4	98 100.0%
		女性	7 13.2% -.7	22 41.5% -2.6	24 45.3% 3.4	53 100.0%
	合 計		24 15.9%	84 55.6%	43 28.5%	151 100.0%

4. 学生の「食」と「学生食堂」 に関する意識

学生の「食」に関する意識を先ずみることにする。第6表は、通学形態（住まい）別性別に友人と一緒に食事をすることが多いか否かをみたものであるが、「毎日一緒に食事をとる」に関して、通学形態別にみると、自宅通学者では47.6%、自宅外通学者では28.5%となっており、性別でみると、自宅通学者も自宅外通学者も、男性では「時々一緒に食べる」が過半数を占め、女性では、「毎日一緒に食事をとる」が最も多くなっている。

ただし、男女とも、自宅外通学者の方が友人と一緒に食事をとることが少なく、時々一人で食べる個食の機会が多い傾向がみられる。

なお、第7表は、「食事を家族と一緒にとるか否か」について、通学形態別性別にみたものであるが、自宅通学者の場合に、男性では「時々家族と一緒に食事をとる」が58.1%を占

め、女性の41.8%とは5%の有意水準で有意差があり、女性では「一人で食事をすることが多い」が25.3%で、男性より10ポイント高いが、8%の有意水準まで認めれば有意差があるといえる。自宅外通学者の場合は、男性の方が女性より「一人で食事をするが多い」が84.5%を占め、女性より12.8ポイント高く、6%有意水準を認めるとすれば、有意差があるといえる¹⁴⁾。

以上のように、学生の多くは、学生生活において、友人とのコミュニケーションは、非常に重要なウェイトを占めているといえる。しかも、昼休みにそのコミュニケーションを行っている学生も多い。友人と、時々、あるいは毎日食事をすることを楽しみにしているといえるだろう。

したがって、学生を大学に引きつける手段と

14) 自宅外通学者で、「毎日家族と一緒に食事をとる」と答えているのは、普段は家族と住んでいないので、記入間違いか、住んでいる場合のことを想定して回答しているのであろう。

第7表 通学形態別性別家族と一緒に食事をとるか否か

住まい			家族と一緒に食事をするか			合 計
			1人で食事をする ことが別い	時 々	毎日一緒に食事 をとる	
自 宅	性別	男性	18 15.4% -1.8	69 58.1% 2.3	31 26.5% -1.0	117 100.0%
		女性	23 25.3% 1.8	38 41.8% -2.3	30 33.0% 1.0	91 100.0%
	合 計		41 19.7%	106 51.0%	61 29.3%	208 100.0%
自宅外	性別	男性	82 84.5% 1.9	13 13.4% -1.5	2 2.1% -1.2	97 100.0%
		女性	38 71.7% -1.9	12 22.6% 1.5	3 5.7% 1.2	53 100.0%
	合 計		120 80.0%	25 16.7%	5 3.3%	150 100.0%

しては、学生に受け入れられるような多目的スペースとして使える食堂を用意する必要があるが、都会の中にある大学で、昼食時だけ利用する食堂に広いスペースを割くことができない現実がある。大学生協食堂という施設の所有者は、生協ではなく、大学であるので、学生は生協に混雑解消を要求してくるが、生協には学生の不満、要求を大学側に伝えること以上のことはできない。

多目的スペースを作ることができなければ、少し昼休み時間を長くして、ゆっくり待っていても食べることができるようにするとか、授業時間をずらして食堂の混雑解消を図るのも一つの方法ではあるが、後者の方法は友人との会食や昼食時のサークル活動を楽しむことを阻害しかねないので、学生には必ずしも歓迎されない可能性が高い。施設の拡充や授業時間をずらすことが不可能なら、不満を解消する方法としては、学生に食堂ではあまり談笑しないで、座席の回転率を上げることに協力してもらうとか、

生協職員が学生に対してもっと親身になって食事や健康のための「食」知識を提供するとか、接客マナーを高め親近感を与えるように努力することも必要であろう。また、豊富なメニュー、味、ボリュームの自由度、リーズナブルな価格で食事を提供することに関しては、具体的な解決課題として重要であろう。これらについて学生達がどのように思っているのかについて次に検討しよう。

第8表は、通学形態別に生協食堂価格の満足度別生協食堂全体の満足度をみたものである。通学形態別に生協食堂価格の満足度、あるいは全体の満足度に有意差があるとはいえないが、いずれの場合も生協食堂価格に満足している場合は、生協食堂全体に関してもまずまず満足しているといえる。性別に関しても、生協食堂価格の満足度、全体の満足度に関して有意差があるとはいえないが、価格の満足度が高くなるにつれて生協食堂全体への満足度も高くなる傾向が統計的にも有意であるといえる。

第8表 通学形態別生協食堂価格の満足度別生協食堂全体の満足度

住まい			生協食堂全体の満足度					合 計
			非常に不満	少し不満	まあまあ満足	かなり満足	非常に満足	
自 宅	生協 食堂 価格 の満 足度	非常に 不満	10 28.6%	12 34.3%	8 22.9%	4 11.4%	1 2.9%	35 100.0%
		少し不満	1 2.6%	19 50.0%	9 23.7%	9 23.7%		38 100.0%
		まあまあ 満足	4 4.7%	6 7.0%	47 54.7%	26 30.2%	3 3.5%	86 100.0%
		かなり 満足	1 2.9%	1 2.9%	4 11.4%	27 77.1%	2 5.7%	35 100.0%
		非常に 満足			1 7.7%	3 23.1%	9 69.2%	13 100.0%
	合計		16 7.7%	38 18.4%	69 33.3%	69 33.3%	15 7.2%	207 100.0%
自宅外	生協 食堂 価格 の満 足度	非常に 不満	8 40.0%	7 35.0%	4 20.0%	1 5.0%		20 100.0%
		少し不満	2 4.3%	21 45.7%	18 39.1%	5 10.9%		46 100.0%
		まあまあ 満足	3 6.5%	7 15.2%	23 50.0%	12 26.1%	1 2.2%	46 100.0%
		かなり 満足		2 7.4%	6 22.2%	15 55.6%	4 14.8%	27 100.0%
		非常に 満足		1 8.3%		5 41.7%	6 50.0%	12 100.0%
	合計		13 8.6%	38 25.2%	51 33.8%	38 25.2%	11 7.3%	151 100.0%

生協食堂の味の満足度別に、あるいはボリューム別、メニューの多様性から生協食堂全体の満足度をみると、それぞれの満足度が高いほど食堂への満足度が高くなっていることが統計的に有意な差として認められる。

第9表は、順序尺度のデータを間隔尺度として扱い、生協食堂全体の満足度に影響する諸要因を主成分分析法で算出したものである。その結果をプロットしたのが第9.1表である。生協の食堂の価格、味、ボリューム、メニューの多様性が、生協食堂全体の満足度に影響を与えており、生協食堂昼食後のお喋りに関しては、学

生にとって重要なことではあるが、食堂の評価とはあまり関係がなさそうであることがわかる。

第10表は、順序尺度を間隔尺度としてみなし、学生食堂の満足度に関して重回帰分析を行ったものである。単一の影響力では、生協食堂味の満足度という要因が最も大きそうだが、ここでは自由度調整済みの寄与率の最も高いモデル4に注目する¹⁵⁾。

15) 寄与率は、回帰式が実際に役立つか否かを評価する指標であり、説明変数を増やすほど、高い値になっていくという問題点を持っている。そのため、無意味な変数を補正した寄与率である自ノ

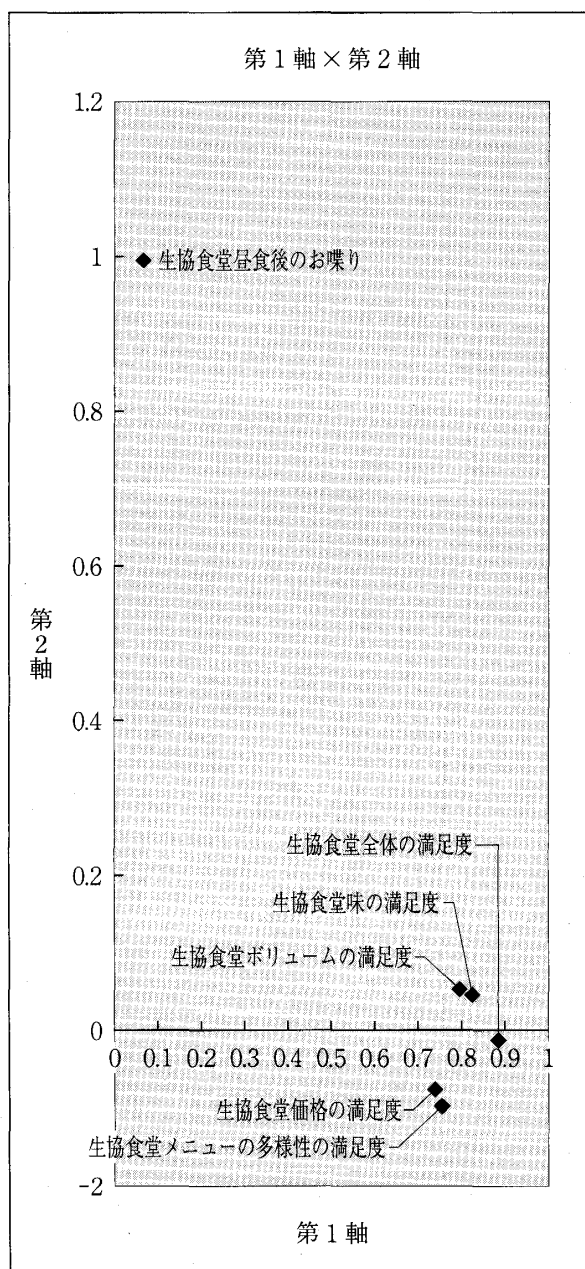
第9表 生協食堂全体の満足度に影響する諸要因成分

	第1軸	第2軸
生協食堂価格の満足度	0.736805	-0.07787
生協食堂味の満足度	0.818889	0.047776
生協食堂ボリュームの満足度	0.793306	0.053239
生協食堂メニューの多様性の満足度	0.748241	-0.09783
生協食堂全体の満足度	0.882191	-0.01309
生協食堂昼食後のお喋り	0.061177	0.993271

第10.1表は、第10表の係数部分であるが、共線性の統計量が小さく、多重共線性が生じていないことを確認して、モデル4の標準偏回帰係数を表している標準化係数ベータの数値よりもt値の数値をみると、メニューの多様性の満足度、価格の満足度、ボリュームの満足度、味の満足度の順に生協食堂全体の満足度に影響力を持っているといえる。第10.1表の単相関と偏相関の項目をみると、味の満足度と生協食堂全体の満足度との単相関では0.641と最も高いが、その単相関から、価格やボリューム、メニューの多様性などの他の影響を除いた相関は0.258で、小数点第4位までみるとボリュームの満足度以下となり、相関がかなり弱くなる¹⁶⁾。

別な視点からみると、その食堂全体の評価を高めるためには、料理の味の寄与率が単一要因としては最も高いので、料理の味の評価を高めなければならないが、料理の味の満足度というのは、価格、ボリューム、メニューの多様性などの他の諸要因を含んだものであるため、料理の味の評価を高めるためには、味に含まれた諸

第9.1表 第9表を散布図にしたもの



、自由度調整済み寄与率が使われる。重回帰分析の寄与率はR2という記号で表される。寄与率R2の平方根Rを重相関係数という。モデル4でも寄与率が0.623であるので重回帰式の精度はやや高いという程度だろう。

- 16) 2004年5月に実施した同種の調査の分析結果では、メニューの多様性、味、価格、ボリュームの順に食堂全体の満足度への影響力が強いという結果が出るので、心理的な満足度は状況により多少とも相対的なことであることにも留意しておくべきだろう。

要因の満足度を高めなければならないということがわかる。

終わりに

学生が学生食堂に関して持っている要望は、生活協同組合が毎年発行する「通常総代会議案書」によって概括的な問題は分かるし、日常的な要望は、食堂に設置している「一言メモ」や、生協などによって調査された『生協のお店に関

モデル集計^e

第10表 学生食堂の満足度に関する重回帰分析

モデル	R	R2乗	調整済み R2乗	推定値の標準誤差
1	.641 ^a	.410	.409	.815
2	.725 ^b	.526	.524	.732
3	.775 ^c	.601	.598	.672
4	.792 ^d	.628	.623	.651

a. 予測値：(定数), 生協食堂味の満足度。 b. 予測値：(定数), 生協食堂味の満足度, 生協食堂価格の満足度。

c. 予測値：(定数), 生協食堂味の満足度, 生協食堂価格の満足度, 生協食堂メニューの多様性の満足度。

d. 予測値：(定数), 生協食堂味の満足度, 生協食堂価格の満足度, 生協食堂メニューの多様性の満足度, 生協食堂ボリュームの満足度。

e. 従属変数：生協食堂全体の満足度。

係数^a

第10.1表 第10表の係数の部分

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	.842	.148		5.692	.000
	生協食堂味の満足度	.682	.043	.641	15.741	.000
2	(定数)	.471	.139		3.396	.001
	生協食堂味の満足度	.484	.044	.454	10.919	.000
	生協食堂価格の満足度	.368	.039	.388	9.323	.000
3	(定数)	.198	.132		1.505	.133
	生協食堂味の満足度	.326	.045	.306	7.213	.000
	生協食堂価格の満足度	.313	.037	.330	8.478	.000
	生協食堂メニューの多様性の満足度	.311	.038	.329	8.143	.000
4	(定数)	3.978E-02	.131		.303	.762
	生協食堂味の満足度	.236	.047	.222	5.011	.000
	生協食堂価格の満足度	.262	.037	.276	7.066	.000
	生協食堂メニューの多様性の満足度	.282	.037	.298	7.517	.000
	生協食堂ボリュームの満足度	.222	.044	.214	5.020	.000

a. 従属変数：生協食堂全体の満足度。

係数^a

モデル		Bの95%信頼区間		相関係数			共線性の統計量	
		下限	上限	ゼロ次	偏	部分	許容度	VIF
1	(定数)	.551	1.133					
	生協食堂味の満足度	.597	.767	.641	.641	.641	1.000	1.000
2	(定数)	.198	.743					
	生協食堂味の満足度	.397	.571	.641	.501	.399	.770	1.299
	生協食堂価格の満足度	.290	.445	.606	.443	.341	.770	1.299
3	(定数)	-.061	.457					
	生協食堂味の満足度	.237	.414	.641	.358	.242	.627	1.595
	生協食堂価格の満足度	.240	.385	.606	.411	.285	.744	1.344
	生協食堂メニューの多様性の満足度	.236	.387	.623	.397	.273	.689	1.452
4	(定数)	-.218	.298					
	生協食堂味の満足度	.144	.329	.641	.258	.163	.538	1.859
	生協食堂価格の満足度	.189	.335	.606	.352	.229	.689	1.451
	生協食堂メニューの多様性の満足度	.208	.355	.623	.371	.244	.671	1.489
	生協食堂ボリュームの満足度	.135	.309	.617	.258	.163	.579	1.727

a. 従属変数：生協食堂全体の満足度。

しての評価（日頃感じていること）¹⁷⁾などを知ることができるが、もう少し一般化された形態で課題を把握しようとするには、組合員である学生の他、増えつつある非組合員である学生の意見、要望に関しても知る必要があり、本稿では、学生一般の「食」の行動と意識について分析することにした。

学生という若者層一般にみられる、決して豊かとはいえない朝食、昼食の食行動の実態が龍谷大学の学生にもみられることが明らかになると共に、健康を配慮した「食」に関しても、「食育」が叫ばれる現状を反映していることが明らかになった。

学生の昼食行動のなかでの学生食堂に関する意識から、混雑に関する不満などの食堂という施設に関する要因を除外して考えた場合、食堂の満足度に関しては、料理の「味」の評価は重要に違いないが、その「味」の評価には、メニューの多様性、価格、ボリュームなどの満足度に関する諸要因が内在されていることがわかった¹⁸⁾。

龍谷大学生協では、数年前に、個人情報保護の観点から、大学側から学生の名簿をすぐに提示して貰えず、組合加入者が激減したことも2億円以上の赤字の主要因になったといわれている。最近では、大学当局との関係も改善されつつあるが、平成15年施行の「個人情報の保護

に関する法律」は、個人の権利利益を保護するためのものであるにもかかわらず、学生及び保護者に対して生活協同組合に関する情報を十分伝えることができず、消費者としての学生、教職員の利益、利便性から考えると不利益に作用している場合もある。また、龍谷大学深草学舎のように、大学周辺に食堂、レストラン、コンビニなどのたくさんの諸施設ができ、生活協同組合に加入しなくても、学生生活に不自由を感じない社会的状況があることも生協非組合員の増加に影響を与えているといえる。

ところで、生協非組合員が生活協同組合を利用していないかという点、自動販売機でプリペイドカードを買うことができ、生協を利用する際は友達の生協組合員カードを借りて生協を利用している学生もいる。レジでのスピード化や、このような不正が組合員の利益に反するという点を知識だけで理解してもらうことは難しいので、組合員証をICカード化することも生活協同組合の経営健全化のためには必要であろう。本稿では、「食」に関する行動と意識を分析するのが主目的であるが、赤字を出さない経営、過去の赤字解消の経営健全化を進めないことには、「食」に関する改善にも影響しかねない状況があることに留意すべきである。

以上の点を改善するには、学生と大学の変化に対応した生協づくりと、学生及び保護者、大学当局に対し、生活協同組合の意義を十分認識して貰う為の生協活動と情宣をあらゆる手段を駆使し、生協への理解を深める必要があるだろう。

（受理 2005年12月26日）

17) 『生協のお店に関しての評価（日頃感じていること） 2005-1コープモニターアンケート』大学生協京都事業連合 2005.10参照。

18) 料理の味という要因には、メニューの多様性、価格、ボリュームの諸要因の他、食堂に対する綺麗、明るい、落ち着いた雰囲気、職員の接客マナーの良さなどのイメージの他、混雑の度合いもマイナスあるいはプラスに作用する可能性が考えられるし、食材の鮮度、味を構成する基本的な甘み、酸味、塩味、苦み、旨味、辛みなどの諸成分のその地域、時代、消費者階層にあったバランス、食事をする側の欲求の度合いや食育環境、別の視点からいうと、環境汚染の度合い、水、季節感、暮らし、健康などにも関係するので、客観的に測定するのは難しいが、その時々にあった味の改善を絶えず行う必要があるだろう。